

日本中國學會報 第七十一集
二〇一九年十月十二日 發行 拔刷

『玄應音義』反切と『切韻』反切

——中古效攝所屬字の分析——

太田 齋

『玄應音義』反切と『切韻』反切

——中古效攝所屬字の分析——

太田 齋

1. 前言

『玄應音義』は上田一九八一が指摘するように、異本の系譜關係が複雑で、概ね敦煌本—高麗藏—大治本系の方が沙藏本—明藏本—海山仙館本系より原型を留めている點が多いとはいえ、その逆と思われる部分もある。このことが釋文研究を困難にしている。本稿では諸本間の異同については詳論せず、特に言及すべき必要なしと判断できる限り、上田正一九八六の底本である叢書集成本の代用として、同治八年仁和曹氏重刊本を使用する（但し出現箇所は叢書集成本で提示）。兩者にはときに微細な差異が存在するが、本稿の論旨には影響しない。テキスト間の異同が議論に影響する場合に限り、テキスト名（本論末尾参照）を挙げる。

『玄應音義』や『慧琳音義』のような初期の佛典音義は無から全てを獨力で作り上げたものではない。そこには多くの参考文獻の名前が擧がり、小學書に止まらず經史子集の多岐に亙る様々な文獻から訓釋が引用されている。これは當時利用可能であったあらゆる文獻の音注、義注を縦横無盡に使ったということである。このような引用を含

めて、文獻全體を玄應、慧琳の獨創、統一體と考えるのが普通であり、そのような前提で調査分析が行われる。しかしながら義注が、大意を損なうことなく、字句をアレンジして量的な調整をすることが比較的容易であるのに對し、反切は誰もが簡単に作り出せるものではないため、先行小學書に見えるものが墨守され、そのまま取り込まれることがある。これもまた著者が體現する音韻體系に合致するが故の引用という前提で分析が進められるのが通常だが、果たしてそうだろうか。音韻研究においてはこのような引用が異質な要素の混入を許すという點に配慮すべきと考える。

玄應はその事蹟が詳らかではない。周法高一九四八は神田一九三三に基づき、長安方言の話者と見做し、『玄應音義』には長安方言が反映しているとしたが、反切の整理結果が概ね『切韻』の體系と變わらないことから、陳寅恪一九四八を承けて、周法高一九四八を周法高一九六八、周法高一九六八に収録する際に「七世紀前半の首都所在地の長安方言（七世紀上半首都所在地の長安方言）（三七六頁）としていたのを「七世紀前半の首都士大夫階級の讀書音（七世紀上半首都士大夫階級の讀書音）」（一九六八、一七〇頁；一九六八、二二二頁）

と改めた。^①これに對し太田一九九八^②は『玄應音義』では書名を提示することがないものの、小島一九八六、一一九頁のいう「^③蔭」の小學書（使用に當り、ことさら書名を擧げるに及ばない誰もが知る常用辭書）として『玉篇』が縦横に引用され、その反切もが大量に取り込まれたことにより、結果として『切韻』音系に似た『玉篇』音系（江南讀書音の體系とされる）がそこに反映することになったものと主張した。そして長安音、『切韻』音にはない江南音の特徴（從母―邪母の混同等）が『玄應音義』に見られることもこれにより説明できると指摘した。

2. 切韻系韻書について

反切だけみると、『玄應音義』には『切韻』と被切字、上下字の三者が一致するが、原本『玉篇』とは一致しないというものも少なくない。『玄應音義』には『切韻』という書名は全く現れない。もし『玉篇』のみならず、『切韻』についても書名を擧げずに利用していることが確認されれば、『切韻』がもう一つの「蔭」の存在（蔭の韻書）ということになる。しかし原本『切韻』は釋文が甚だ簡單で、殆どが數字に留まり、中には釋文を缺く場合さえある。このため反切が一致していても、義注の一致には頼れない。他方、『玄應音義』の側でも譯音などでは反切のみ擧げ、義注を缺く。中には『切韻』と『玉篇』の雙方の反切に一致するものもある。つまり『切韻』と『玄應』の反切がそもそも一致しているということ。玄應が『切韻』を利用したと證明するのは極めて難しいが、本稿では效攝諸韻字を對象に、量的な面も踏まえて『切韻』の利用を明らかにしたい。

『玄應音義』と『切韻』を比較するに當り、『廣韻』を『切韻』の代

用とする譯には行かない。何故なら、『玄應音義』は成書年代が、神田一九三三の考證により六五四―六六一頃と推定され、『切韻』（六〇一）に遅れること僅か五十年ほどで、もし『玄應音義』が『切韻』を利用しているならば、原本『切韻』若しくはその早期の改訂本に基づいたに違いないからである。一般に『切韻』系韻書は後のものほど、小韻收録字數が増え、釋文も煩瑣になつて行く。『廣韻』（二〇〇八）はその最終決定版であつて、現存する他の『切韻』系韻書テクニストのいづれよりも多くの増加字を含み、釋文の字數も大幅に増えている。その中には、『玉篇』を利用した結果らしく思えるところがあり、影響關係を見る上で判断を誤る虞がある。反切の面でも『廣韻』獨自と思われる改訂があり、それが『玉篇』反切と一致する場合があり、音韻の面でも同様の危険がある。

以下に廣韻を切韻の代用とすることのできないことを示す例の一端を擧げる。いづれも『廣韻』が『玉篇』の反切、釋文を利用した可能性があるものである（下線部が該當部分）。以下の擧例では、テクニスト名（略稱は末尾参照）を太字にし、『』は附さない。

1) 矯

原本切韻 矯 或作矯。居沼反。三。…… 輯料42817

切三 矯 或作矯。居沼反。三。

王三 矯 居沼反。或作矯。七。

廣韻 矯 詐也。……居天切。十二。

玉篇佚文 不矯威儀 矯，居天切。『賈注國語』曰：行非先王之法，

曰矯。『玉篇』曰：矯，假也。詐也。……王逸

注『楚辭』曰：眞也。『爾雅』曰：勇也。『蒼韻

篇』曰：正也。…… 慧苑 2/2 (馬淵 no.1130)
Cf. 不擒威儀 擒，居天反。『賈注國語』行非先王之法，曰擒。

《玉篇》曰：擒，假也。詐也。『說文』擒，假也。

慧琳 21/41 (馬淵 no.343)

Cf. 萬象 矯 几趙反。詐。 5/35a1

Cf. 宋玉 矯 几兆切。強也。詐也。揉箭箝兒。 2/56a6

2) 矯

原本切韻 嘲 張交反。三。…… 輯對 2/62/10

切三 嘲 張交反。三。……

王二 嘲 張交反。亦嘲。又嘲嘜。四。……

王三 嘲 張交反。言調。三。……

刊 嘲 言語。戲嘲詡。張交反。五。……

廣韻 嘲 言相調也。陟交切。五。……

玉篇佚文 嘲之 上陟交反。『蒼頡篇』云：嘲，調也。顧野王云：嘲

謂相戲調也。『說文』從口，朝聲也。慧琳 89/16b

(馬淵 no.276232)

宋玉 嘲 陟交切。言相調也。 1/50a5 = 元玉 96/3

なお本稿では、『玉篇』は原本の趣を伝える所謂「原本系『玉篇』」
と宋本、元本など大幅な改訂を経た後の『玉篇』とで大きな違いがあ
るので、區別して前者を單に『玉篇』、後者を『宋本玉篇』、『元本玉
篇』と稱する。以下、例示に當り、韻書、辭書の掲出字は太字にして
釋文との對比を明瞭にする。頁の表裏は a、b で、卷上中下は 1、2、3 で
示す。重文號(踊り字)は一律「、」で代用する。寫本に現れる「也」

『玄應音義』反切と『切韻』反切

を表す「、」は「也」に置き換えた。これにより、「元々「也」と表記
している場合と區別がつかなくなっているが、本稿の議論に影響する
ことはない。異體字及び誤字は論旨に支障を來たさない範圍で通行字
で代用したところがある。該當部分が缺損しているテキストは一言
及しない。原本『切韻』は李永富一九七三に據る。併せて挙げる「英
倫、切三、王一、王二、王三」等の『切韻』系韻書テキストも同様。
『玉篇』佚文は馬淵一九五二で出現箇所を確認したが、引用箇所の認
定については必ずしも従っていない。他、高山寺古辭書資料第一の宮
澤俊雅編「掲出字一覽表」から、大きな恩恵を蒙ったことを特筆して
おきたい。これらに示された『玉篇』佚文の出典名はそれと分かる程
度に、一部省略した形で記すに止める。

3. 『玄應』反切と『切韻』反切の一致

反切用字は易識易寫で多音字でないものから選擇されるのが常であ
るから、偶然の一致の可能性も完全に否定することはできない。既に
述べたように、反切用字の一致のみから引用を證明することは極めて
困難である。しかしながら、以下の『切韻』效攝蕭韻去聲嘯韻相當の
『玄應音義』全反切を見られたい。³⁾

蕭去 嘯韻

透 眺 丑吊

眺 他吊 〓 切韻

越 他吊 〓 切韻

越 他吊 〓 切韻 (『廣韻』に見えず)

蹕 他吊 〓 切韻 (『廣韻』に見えず)

影	黝	撇	竅	嗽	徹	燎	尿	溺	屍	調	掉	鈔	跳	定
	黝::一吊	撇::口吊	竅::口吊	嗽::古吊	徹::古吊	燎::力吊	尿::奴吊	溺::乃吊	屍::乃吊	調::徒吊	掉::徒吊	鈔::徒吊	跳::他吊	
				切韻	切韻	切韻	切韻			切韻	切韻	切韻	切韻	切韻
						(『廣韻』に見えず)							(『廣韻』に見えず)	

傍線を附した部分は『玉篇』と一致する。「(『廣韻』に見えず)」との注記は、被切字がどの『切韻』系韻書テキストの当該箇所にも現れないことを意味する。出現頻度は省略。全一九例中、『玉篇』と一致が一、二、『切韻』のみと一致が七、雙方と一致が五、どちらにも一致しないものが〇である。『玉篇』と一致しない反切は全て『切韻』と一致している。中には『玉篇』、『切韻』の雙方と一致しているものもある。嘯韻は収録小韻数が少ないとはいえ、これを偶然の一致と片付けすることは難しい。むしろ『玄應音義』において『切韻』もまたもう一つの「蔭の辭書」(蔭の韻書)として利用されていたと考えるべきである。そして被切字が『玉篇』、『切韻』に現れないものについては、同

音關係にある字の反切を二書から援用したのであると推測できる。念の爲、以下で釋文についても検討を加える。

4. 一致反切の現れる掲出字の釋文

『玉篇』の場合は反切のみならず、長文の義注もまた手掛かりにできた。長文の義注が一致することは偶然では有り得ないからである。當時の小學書で現存するものは数少なく、『玉篇』を直接引用したと證明することは難しいが、『玄應』と『玉篇』が音、義雙方で一致すれば、『玄應』は獨創でなく、『玉篇』そのもの或いは『玉篇』所據文獻から引用したであろうと言える。それに對し、『切韻』の場合は既に述べたように釋文が數字しかない場合が殆どで、釋文を全く缺く場合さえあるから、偶然の一致を排除し難い。『切韻』の場合は『玉篇』に比べ、引用を證明するのは一層困難なのである。

とは言え、釋文についても検討を加えることは無駄ではあるまい。以下に前掲の『切韻』反切と一致する反切が付された『玄應音義』の掲出字の釋文がどうなっているか、『玉篇』と併せて見て行くことにする。原本『切韻』と一致する部分には「」、『玉篇』とのみ一致する部分には「」を付す。前者には『玉篇』とも一致するものが含まれる。原本『切韻』には見えず、後の『切韻』系韻書にのみ見える一致には「」を付けない。

1) 眺

玄應 求眺 他弔反。『說文』眺，視也。亦望也。察也。 314/3
 原本切韻 糶 賣米也。他弔反。六。眺 視。…… 輯料 353/11
 王二 糶 他弔反。賣米。六。眺 視。……

王三 躍 他弔反。賣(米)。六。眺 視。……
唐韻 躍 賣米。他弔反。七。眺 視。……
廣韻 躍 賣米也。他弔切。十。眺 視也。……
萬象 眺 丑弔反。望也。察(也)視也。 1/96a5
宋玉 眺 丑弔切。眺 望也。 1/43a4 = 元玉 86/10

2) 越 (宋玉、元玉反切とも一致)

玄應 越小 又作踔同。他弔反。謂越、擲也。『韻集』云：越、越也。亦懸擲也。…… 408/5

越牆 他弔反。跳(△越)、擲也。『韻集』云：越、越也。亦懸擲也。…… 543/9

越擲 他弔、直彫二三反。……『韻集』云：越、越也。今言越、擲、是也。 648/4

越梁 他弔反。越、擲也。『韻集』云：越、越也。 893/5

原本切韻 躍 賣米也。他弔反。六。……越 越。…… 輯韻 353/11

王二 躍 他弔反。賣米。六。越 越。……

王三 躍 他弔反。賣(米)。六。越 越。……

唐韻 躍 賣米。他弔反。七。……越 越。……

廣韻 躍 賣米也。他弔切。十。……越 越也。……

萬象 越 達勿(△弔)反。雀行也。跳也。 3/56a3

宋玉 越 他弔、徒聊二切。雀行也。 1/96b10 = 元玉 161/7

3) 越 (原本『切韻』未收。2 越、4 踔、5 眺と異體字の關係か)

玄應 越第 丑校、他弔二反。『上林賦』越、稀間。郭璞曰：懸擲也。『說文』遠也。 243/6

『玄應音義』反切と『切韻』反切

跳越 達澆反。謂縣(△懸)擲也。下救校、他弔二反。遠也。 807/9

原本切韻 躍 賣米也。他弔反。六。眺 視。越 越。覘 聘。眺 叫眺。窳 窳窳。又吐鳥反。 輯韻 353/11

Cf. 越 行兒。褚教反。二。 輯韻 377/7

萬象 越 丑校反。越遠也。 3/55a1

宋玉 越 丑孝切。行兒。丑角切。 1/97a7

元玉 越 丑孝切。行兒。丑角切。跳也。 160/9

4) 踔 (『切韻』未收。2 越、3 越、5 眺と異體字の關係にあるか)

玄應 踔擲 丑罩、丑格二反。『方言』踔、蹇也。郭璞曰：跛者行跳踔不前也。今宜借音他弔反。字體作越。越、擲之也。『韻集』云：越、越之也。 594/3

原本切韻 躍 賣米也。他弔反。六。眺 視。越 越。覘 聘。

眺 叫眺。窳 窳窳。又吐鳥反。 輯韻 353/11

(踔、を收録せず。王三、王三、唐韻、廣韻同)

Cf. (越：行兒。褚教切。二) 踔 踔。 6/377/7 效韻

Cf. (遠：遠。一曰驚夜。救角反。三) 踔 踔。 8/72/9 覺韻

Cf. 廣韻 (越：行兒。丑教切。二) 踔 踔。 416/4 效韻

萬象 踔 彦(△救)卓反。蹇(?)也。踔(△跛)也。蹇也。 2/54a1

宋玉 踔 勅卓切。跛也。踔踔、跛者行。 1/66a5 p.33 下

元玉 踔 救卓切。踔踔、跛行也。 118/10 下

Cf. 越 丑孝切。蹇也。或作踔。 308/12

5)跳 (原本『切韻』未收。2越、3越、4踔、5跳の異體字と見るべきか)

玄應 三跳 他弔反。達澆反。謂懸擲也。 77/2・積 2/843

玄應 三跳 他吊、達澆二反。謂懸擲也。 麗 2/18/6

原本切韻 糶 賣米也。他弔反。六。眺 視。越 越。覘 聘。

眺 叫眺。窳 官窳。又吐鳥反。 輯 6/353/11

(眺 を収録せず。王二、王三、唐韻、廣韻同じ)

玉篇佚文 跳躍 上調寮反、下羊灼反。顧野王云、跳躍謂騰躍也。

『說文』二字竝從足、兆、翟聲也。 慧琳 69/8 (馬淵 no.430)

跳躑 蹶也。蹶也(此二字衍字)。踣也。踊也。類聚 110

(馬淵 no.430)

跳躑 上迢。弘云：躍也。上也。『廣』云：他弔、達澆

(?)反。懸擲也。『玉』云：蹶也。蹶也。踣也。踊

也。弘 110 (馬淵 no.430)

萬象 跳 徒彫反。躍也。上也。 2/54b2

宋玉 跳 徒彫切。『說文』蹶也。一曰跳也。 1/66a8

元玉 跳 徒彫切。竝足蹶起也。 118/9

6)鈹 (もう)一つの反切は『玉篇』反切と一致)

玄應 須鈹 古文鑑同。余招反。『廣雅』銅謂之鈹。『說文』溫器

也。似鬲上有鐙。山東行此音。又徒弔反。今江南有銅

鈹、形似鎗而無腳、上加踞龍爲攀也。…… 657/7・積

14/11a6

玄應 須鈹 古文鑑同。余招反。『廣雅』銅謂之鈹。『說文』溫器也。

似鬲上有鐙。山東行此音。又徒吊(弔)反。江南行

此音。鈹形似鎗而無腳、上加踞龍爲攀也。…… 麗 14/23/9

索鑑 今作鈹同。子(弔)消反。『韻集』云：溫器也。三足

有柄。『字林』云：鑑、容一斗、似鈹。又音遙、一音徒

弔反。 726/4

原本切韻 藿：菜。徒弔反。三。鈹 燒器。又以招反。 掉 振。

搖。又徒了反。 輯 6/356/5

Cf. (遙：餘招反。十八。)鈹 燒器。又徒弔反。 2/47/1

王二 藿 徒弔反。菜。亦作糶。鈹 燒器。……

王三 藿 徒弔反。菜。亦作糶。鈹 燒器。……

唐韻 藿 藿。徒弔反。五。鈹 燒器。又音姚。……

廣韻 藿 藿。徒弔反。七。鈹 燒器。又音姚。……

萬象 鈹 余招反。溫器也。 5/49b5

宋玉 鈹 弔昭切。溫器也。 2/61a10 = 元玉 255/11

Cf. 鈹 余招切。鈹苙、羊桃也。『詩』亦作鈹。 2/23b6

Cf. 元玉 鈹 余招切。鈹苙。『詩』亦作鈹。 197/13

7)掉 (反切は『玉篇』と一致)

玄應 戰掉 徒弔反。『字林』掉、搖也。『廣雅』掉、震(弔)振、動

也。…… 63/3

掉臂 徒弔反。『廣雅』云：掉、動也。又『說文』云：掉、搖

也。 658/5

掉衣 徒弔反。『廣雅』云：掉、振、搖、動也。…… 687/2

掉掉 徒弔反。掉、搖也、振也。…… 763/7

掉臂 徒弔反。『廣雅』掉、動、搖也。 767/5
爲掉 徒弔反。『字林』掉、搖也。『廣雅』掉、振、動也。……

830/9

原本切韻 藿 菜。徒弔反。三。……掉 振。搖。又徒了反。 輯

韻 6/356/5

王一 藿 徒弔反。菜。亦作攢。……掉 (以下缺損) ……

王二 藿 徒弔反。菜。五。……掉 振。搖也。又徒了反。 ……

王三 藿 徒弔反。菜。亦作攢。四。……掉 振。……

唐韻 藿 藿。徒弔反。五。……掉 振也。搖也。又徒了反。

廣韻 藿 藿。徒弔反。七。……掉 振也。搖也。又徒了切。

玉篇 戰掉 ……下『玉』徒弔反。動也。賈逵曰：掉、搖也。『廣

雅』掉、振也。諄也。 大乘理趣 10

萬象 掉 徒弔反。搖也。諄也。 2/344/5

宋玉 掉 徒弔切。搖也。 1/59a5 = 元玉 113/6

Cf. (窈：窈窕。徒了反。二) 輯韻 4/275/11

(“掉”，原本『切韻』上聲「徒了反」小韻に未收。切

三同)。王一、王三、廣韻には見える)

8)調 (『玉篇』反切とも一致)

嘲調 正字作嘲同。竹包反。下徒弔反。『蒼頡篇』云：嘲、

也。謂相調戲也。……『字林』欺、調也。…… 104/8

調戲 徒弔反。謂相嘲調也。弄也。…… 230/9

調投 徒弔反。『廣雅』云：調、欺也。調、賣也。嘲、調也。

『玄應音義』反切と『切韻』反切

原本切韻 藿 菜。徒弔反。三。 鈔 燒器。又以招反。 掉 振。

搖。又徒了反。 輯韻 6/356/5

(調、を収録せず。王一、王三同)

唐韻 藿 藿。徒弔反。五。……調 選也。韻調也。又音茗。

廣韻 藿 藿。徒弔反。七。……調 選也。韻調也。又音茗。

玉篇 佚文 調 適 上『玉』徒堯反。鄭曰：調、猶合和也。又音徒弔

反。如淳曰：調、選也。『廣雅』調、欺也。調、賣

也。調、求也。嘲、調也。又音陟流反。『毛傳』曰：

調、朝也。 大乘理趣 32

萬象 調 徒堯反。合和也。選也。期(欺)也。賣也。 3/10b6

宋玉 調 徒聊切。和合。又大弔切。選、調也。又度也。求也。

元玉 調 徒聊切。和合。大弔切。選也。 1/83b2 147/9

9)尿 (『切韻』では小韻代表字)

玄應 立尿 (=尿) 又作溲同。奴弔反。『字林』尿 (=尿)、小便也。

『通俗文』出脬爲尿 (=尿)。醫方多作溺。古字假

借也。…… 1078/8

原本切韻 尿 奴弔反。一。 輯韻 6/355/12

英倫 尿 奴弔反。□□□『說文』作、從尾、水聲。

王一 尿 奴弔反。小便。正作溺、或作尿。一。

王二 尿 奴弔反。亦灑。一。
 王三 尿 奴弔反。小便。或正作灑。一。
 唐韻 尿 亦作弱。奴弔反。一。
 廣韻 尿 小便也。或作溺。奴弔切。一。
 萬象 灑 乃弔反。小便。溲也。 3/72a2
 宋玉 灑 乃弔切。人小便。今作尿。 2/7a10 = 元玉 174/3

10) 溺 = 尿

玄應 矢溺 又作屎。『說文』作菌同。式旨反。糞也。下正體作灑。
 屎 (▷) 尿 二形同。月 (▷) 弔反。經文作，假借耳。
 635/1
 尿 二形同。乃弔反。經文作，假借耳。 麗 13/42/22

原本切韻 尿 奴弔反。一。 輯料 6/355/12
 英倫 尿 奴弔反。□□□『說文』作，從尾，水聲。
 王一 尿 奴弔反。小便。正作溺，或作灑。一。
 王二 尿 奴弔反。亦灑。一。
 王三 尿 奴弔反。小便。或正作灑。一。
 唐韻 尿 亦作弱。奴弔反。一。
 廣韻 尿 小便也。或作溺。奴弔切。一。
 萬象 灑 乃弔反。小便。溲也。 3/72a2
 宋玉 灑 乃弔切。人小便。今作尿。 2/7a10 = 元玉 174/3

11) 燎 (反切は『玉篇』と一致)
 燔燎 ……下力弔反。『說文』放火也。又火田爲燎。『廣雅』

燎，乾也。 399/3
 原本切韻 類 類類，長頭。力弔反。四。 炮 牛脰交。 燎 燎
 煠。又落蕭反。料 度。又落蕭反。 輯料 6/357/5
 (‘燎’を収録せず。王一、王二、王三、唐韻、廣韻いずれも未收)
 Cf. 燎 照。力召反。又力小反。四。 輯料 6/366/7
 Cf. 燎 繚繞。力小反。一。 燎 炙。或作燎。 輯料
 4/284/13

Cf. 燎 庭火。力昭反。又力照反。一。 輯料 2/54/6
 萬象 燎 力即 (▷) 昭反。庭火也。 5/138a4
 玉篇 焚燎 下『玉』力昭、力弔二反。『周禮』邦之大事供墳 (▷) 燹
 = 焚) 燹庭燎。鄭眾曰：墳 (▷) 燹 = 焚。燹以麻爲燹也。
 鄭玄曰：墳 (▷) 燹 = 焚。大 (▷) 火也。樹於門外曰
 大燹，於內曰庭燎。鄭玄曰：門燎地燹也。『毛詩箋』 (= 箋)
 『云：火田爲燎也。』『說文』放火也。『廣雅』燎，乾也。
 大乘理趣 22

宋玉 燎 力弔切。火在門外曰燹，於門內曰庭燎。國之大事樹以照眾
 也。又放火也。 3/7a2
 Cf. 奠 力弔切。奠，祭天也。 3/6a7
 元玉 燎 力弔切。火在門內曰庭燎。又放火也。 301/10

12) 微 (反切は『玉篇』又切と一致)
 玄應 四微 古弔反。四門巷也。即歷中四微曰是其事也。 133/6
 四微 古弔反。四門巷也。即歷中四微曰是其事也。 665/4
 四微 古弔反。四門巷也。即歷中四微曰是其事也。 748/5
 微循 又作邀同。古堯、古弔二反。……微，遮也。循行也。

『漢書音義』曰：所謂遊微循以備盜賊也。 917/3

原本切韻 叫 呼。古弔反。五。微 小道。噉 行滕。又古烏反。

警 訐。激 水急。又古歷反。輯 6/355/1

王二 叫 (▽叫) 古弔反。呼也。從乙。亦噉同。六。微 小道。

……

王三 叫 古弔反。亦噉。五。…… 微 小道。……

唐韻 叫 (▽叫) 叫 (▽叫) 呼。古弔反。六。微 循也。小道也。

……

廣韻 叫 呼也。古弔切。十一。…… 微 循也。小道也。……

萬象 微 古堯反。要也。抄遮也。 3/48a6

宋玉 微 古么切。要也。相如『封禪書』微麋鹿之怪獸。微，

遮也。又古弔切。邊 (▽遮?) 微也。 1/94a4

元玉 微 古么切。要也。求也。古弔切。邊 (▽遮?) 也。 157/3

13) 噉 (反切は『玉篇』とも一致)

玄應 吹噉 又作噉警二形同。古弔反。噉喚也。呼也。亦鳴也。 麗 5/19

噉 又作噉警二形同。古弔反。噉，呼也。鳴也。…… 618/2

原本切韻 叫 呼。古弔反。五。微 小道。噉 行滕。又古烏反。

警 訐。激 水急。又古歷反。輯 6/355/1

(噉) を収録せず。王一、王二、王三同)

唐韻 叫 (▽叫) 叫 (▽叫) 呼。古弔反。六。…… 噉 噉喚，深

聲。……

廣韻 叫 呼也。古弔切。十一。…… 噉 噉喚，深聲。……

玉篇 警 古弔反。『說文』痛呼也。『蒼頡篇』大呼也。野王案，此亦

與噉字同，在口部。或爲噉字，在田部。『漢書』及噉者爲

『玄應音義』反切と『切韻』反切

之則苟鉤釵析辭而已。晉灼曰：此噉字。 12/4/2

噉 布卽反。……野王案，噉，互呼也。『說文』高聲也。

一曰大呼也。『春秋公羊傳』曰：魯公噉然而哭是。『介

雅』大謂之噉也。或爲噉字。或爲叫 (▽叫) 字。並在

口部。或爲噉 (= 噉) 字，在言部。 159/3/1

玉篇佚文 噉喚 上古弔反。噉 顧野王云：噉，呼也。『說文』吼

也。從口，敦聲。慧琳 24/5 (馬淵 no.255)

萬象 噉 古弔反。鳥也。呼也。孔 (▽吼) 也。空也。 2/8b4

宋玉 噉 古弔切。『說文』曰：吼也。一曰噉，呼也。 1/48b1

元玉 噉 古弔切。孔 (▽吼) 也。呼也。 93/9

14) 窳 (『切韻』小韻代表字)

玄應 窳孔 苦弔反。窳亦孔也。『說文』窳，空也。『泥恆經』作窳，

力彫反。『蒼頡篇』小空也。 65/1・積 2/2b/10

玄應 窳孔 苦弔反。窳亦孔也。『說文』窳，空也。『泥恆經』作窳，

力彫反。『蒼頡篇』小窗也。 麗 2/5/12

原本切韻 窳 穴。苦弔反。二。擊 (= 噉) 擊。 輯 6/356/12

王一 窳 苦弔反。穴。三。……

王二 窳 苦弔反。孔。二。……

王三 窳 苦弔反。穴。二。……

唐韻 窳 穴。苦弔反。穴。二。……

廣韻 窳 穴也。苦弔切。二。……

玉篇佚文 窳 口弔反。孔也。空也。 新撰字鏡 662/4

萬象 窳 口弔反。孔也。空。 3/86a4

宋玉 窳 口弔切。穴也。空也。 2/12a7 = 元玉 181/1

15) 擻 (= 擊) (原本『切韻』、玉篇、宋玉、元玉いずれも未收)

玄應 覈身 ……經文作擻、口弔反。擻、擊也。 54/5

原本切韻 竅：穴。苦弔反。二。擻 (= 擻) 擊。 輯料 6/356/12

英倫 竅：穴。苦弔反。二。擻 (= 擻) 擊。

王一 竅 苦弔反。穴。三。擻 (= 擻) 擊。 ……

王二 竅 苦弔反。孔。二。擻 (= 擻) 擊。

王三 竅 苦弔反。穴。二。擻 (= 擻) 擊。

唐韻 竅 穴。苦弔反。穴。二。擻 (= 擻) 『說文』云：旁擊。

廣韻 竅 穴也。苦弔切。擻 (= 擻) 旁擊。亦作擻。

萬象 擻 口予 (◇弔) 反。旁擊也。 2/39b2

宋玉 擻 口弔切。『說文』曰旁擊也。 1/57b8

元玉 擻 口弔切。旁擊曰擻。 105/10

16) 黝

玄應 黝羅 於糺、一子 (◇弔) 二反。從頻婆羅至黝羅破、此數名也。亦不定也。 51/25

黝羅 於糺、一弔二反。從頻婆羅至黝羅破、此數名也。亦不定也。 大治 1/26a5

黝羅 於糺、一弔二反。從頻婆羅至黝羅破、此數名也。亦不定也。 慧琳所引 42/6a3

原本切韻 窶 窶窶。俗作突。烏弔反。一。 輯料 6/358/10

萬象 黝 於糺反。玄也。塗也。 5/145a2

宋玉 黝 於糺切。玄也。黑也。微青色也。 3/9a10

元玉 黝 於糺切。玄、黑。黝、青色也。 306/7

Cf. 萬象 窶 一子 (◇弔) 反。深見。 3/87b1
Cf. 玉篇佚文 突 (= 窶) 一子 (◇弔) 反。窶。深見 (◇見)。 新撰字鏡 662/5

『玄應音義』と『玉篇』の間で、他書からの引用部分に見られる一致も『玉篇』由来と見做している。『玉篇』の現存部分で確認できないことが多いので、この作業假説には異論もあろうが、重大な判断ミスを招くことはないだろう。これらを見ると義注に關しても、決定的とは言えないが、一定の類似を見出すことができる。ただその利用の仕方は『玉篇』と『切韻』の反切と釋文を切り離してモザイクのように接合しているような印象を與える。義注の場合は「『玉篇』曰」、「『野王案』」の前の部分もまた『玉篇』からの引用である場合があるが、反切については概ねそうではなさそうである。太田一九九八〇では『玉篇』と反切及び釋文がよく一致すると指摘したが、どうやら全體を通してみると、そうは言えない例も少なくない。『切韻』については反切と釋文の雙方がきれいに一致する例を見出すのが更に困難で、それだけから『切韻』反切の利用を證明するのは不可能だが、既に指摘したように嘯韻相當字の反切全てが『玉篇』、『切韻』に一致、そしてこのような傾向が他韻相當字においても見られるということと併せて考えると、玄應が「蔭の辭書」として『玉篇』のみならず、『切韻』をも利用していたと判断して良いのではないか。そうであれば『玄應』音系と『切韻』音系(中古音)が酷似するのは尙更當たり前だということになる。

5. 『韻集』との關係

『玉篇』からの引用が、嚴密には『玉篇』を直接引用したとは限らないことは既に指摘した。『切韻』についても、敦煌出土文獻に原本『切韻』と推定されるテキスト (P.917 及び S.2683) 斷片が存在するから、『切韻』成立に遅れること五十年の『玄應音義』が原本『切韻』もしくはその初期改訂版を利用していたであろうとして議論を進めてきた。もし『切韻』と『玄應』が共通の文獻に據ったことで釋文の一致が見られると想定するならば、その文獻の候補として舉がるのが『切韻』が據った五家韻書の一つ、『韻集』である。論文の形で發表されたものではないが、唐蘭が周法高への私信で、『玄應音義』は『韻集』に基づくと述べている (周法高一九四八²、三六四頁に紹介あり)。周法高一九四八³は特定の韻書に基づくなら、同一字に様々な字面の異なる反切が當てられるはずがないこと、『玄應音義』序文で『韻集』については漢代の『說文』が九千字に留まるのに對し、唐代の『韻集』は三萬字増やしたと述べるに止まり、これに依據したとは述べられていないことを論據に、唐蘭の主張を退けている。しかしながら太田一九九八²⁰で明らかにしたように字書である『玉篇』を利用していけば、複数の反切が現れることは異とするに足りない。そして『切韻』も併せて利用されているのであれば尙更である。もう一つの反論も、『韻集』は周法高一九六二によれば『玄應音義』には引用書として『韻集』が五一回、呂靜『韻集』が二回現れるが、『蔭の辭書』的利用をされたなら、序文でわざわざ『韻集』に據ったと断るとは限らない。つまり周法高一九四八²⁰の反證は強力なものではなく、唐蘭の主張は尙も檢討の餘地がある。

『玄應音義』反切と『切韻』反切

しかしながら、『玄應』所引『韻集』には以下のようなものがあり、もしこれが忠實な引用であるならば、『切韻』以下の釋文全體が『韻集』由来であるならば、『切韻』の體例とは合致していないように見える。

a) 菸瘦 『韻集』一(“一”他本作“乙”)餘反。今關西言菸，山東言薦。薦音於言反。江南亦言殘。殘又作麥，於爲反。菸邑無色也。
麗 10/7/22

原本切韻 於 央魚反。五。……菸 菸莖，茹熟兒。…… 輯 1/131/4

b) 鈔斂 又作廩。『小學篇』作攆同，力沾反。『韻集』曰：鈔，所以斂物也。『說文』斂，斂鏡也。今江南亦有粉廩，某廩也。 674/5
原本切韻 廉 力鹽反。十。(斂 是未收)

c) 袈袞 舉法反。下所加反。『韻集』音加沙。字本從毛作毳、毳二形。葛洪後作『字苑』，始改從衣。…… 59a/9

原本切韻 嘉 古牙反。十五。…… 袈 袈袞。…… 輯 2/109/14
砂 砂石。所加反。六。 袈 袈袞。…… 輯 2/113/13

『韻集』は現在では輯佚書で僅かな佚文を確認できるに過ぎない。反切に至っては林平和一九七六に據れば僅か一九條、存疑の八條を加えても三十に満たない。そこで推論に推論を重ねることになるが、陸志韋一九六三、三七七頁が王三反切の分析で、呂靜の兄呂忱の『字林』の反切について、『字林』反切は些か奇妙である。反切上下字が

一般に筆畫の簡單なものになっているのだ。原文…『字林』反切就有點怪様。切上、下字的筆畫一般都比较簡單」と言う。『魏書』「江式傳」に「忱の弟靜は別個に先に亡くなった左校令であつた李登の『聲類』のやり方に仿つて、『韻集』五卷を作り、宮商角徵羽それぞれで一篇とした。文字に關しては兄と魯と衛ほどの違い（極僅かな違い）しかないが、字音に關しては楚と中原ほどの隔たり（かなりの隔たり。方言音と雅音の違いという意味もあるか太田）があり、時に一致しないところがある。原文…忱弟靜、別仿故左校令李登『聲類』之法、作『韻集』五卷、宮商角徵羽、各爲一篇、而文字與兄便是魯衛、音讀楚夏、時有不同。」とあり、『字林』の音韻體系と『韻集』の音韻體系には大きな差異が存在したかも知れないのだが、こと反切用字に關して林平和一九七六、一六一—三五頁の擧げる例を見ると、「詞、式之」、「僕、大兮」、「犁、力奚」、「煥、乃卯」、「吮、弋選」、「招、口洽」といったものが多く、筆畫の少ない反切用字を使用する傾向は『韻集』にも見える。つまり呂忱『字林』と呂靜『韻集』はたとえ反映する音韻體系に違いがあるにしても、掲出字のみならず、反切用字に關しても強い一致傾向を持っていた可能性がある。「文字與兄便是魯衛」をそのようにとる餘地もあろう。林平和一九七六の擧げ例中には「菸、一餘」という反切がある。「一」は『切韻』における使用例は僅か2例のみ（『廣韻』ではもう1例ある）で、希少反切上字である。前節の16) 黝に現れる「一弔反」は末尾の『玉篇』佚文と對照すると、『切韻』の「寤、烏弔反」小韻の反切に對應する。この小韻中に「黝」は見えないが、玄應の音韻體系では「黝」にこの別音があつたと言ふことなのだろう。16) 黝の「黝、一弔反」が『玉篇』、『切韻』のいずれにも現れないこと、『玉篇』に「寤、一弔反」という反切があることから推測

すれば、「黝」の「寤、烏弔反」相當の字音に對して『玉篇』の「寤、一弔反」の反切を利用したということが考えられるが、この『玉篇』の記載も元を正せば『字林』又は『韻集』から引かれたもの、という可能性もある。呂忱、呂靜の生卒年代からすれば、『玉篇』が『字林』、『韻集』を引いていてもおかしくはない。『玄應音義』において『字林』という書名は周法高一九六二に據れば、全部で四五四回現れ、『韻集』とは大きな開きがある。『玉篇』ほどではないにせよ、『韻集』もまた『玄應音義』において「蔭の辭書」の性格を帯びたものであつたなら、見かけ以上に多くの引用文が隠されていて、「黝、一弔反」がその1例であるかも知れない。

書名を擧げずに直接引用していると思われる實例をここで指摘しておこう。以下の例は上掲a) 菸瘦の釋文の形式に似ていながら、『韻集』という書名は擧げられない。

蟾蜍

上之鹽反，下以諸反。『爾雅』蟾蜍，郭璞曰…似蝦蟇，居陸地。淮南謂之去父，山東謂之去蚊。蚊音方可反。江南俗呼蟾蜍。蟾音食餘反。 448/1

「山東、江南」と方言差を指摘する形式の部分の周法高1948aは玄應の案語と見るが（三八〇—三八五頁）、a) 菸瘦の釋文と比較すると、『韻集』に基づく可能性が窺われる。全面的に依據したのでなくとも、『玄應音義』には他にも『韻集』からの直接の引用を見出すことができるであろう。

遺憾ながら本稿では『韻集』所據説について、説得力ある明確な判断を下せなかつた。もし唐蘭説が肯定されれば、そして玄應所據

『韻集』が呂靜『韻集』の増補改訂版であるならば、『玄應音義』から『韻集』逸文を大量に収集できることになり、『切韻』研究に新たな展望を切り開くことに繋がることになるであろうが、その可能性はかなり小さい。

6. 今後の玄應音義研究に向けた希望的観測

(結論に代えて)

太田一九九八〇の指摘を繰り返すことになるが、『玄應音義』は『玉篇』反切を大量に利用した結果、江南讀書音の特徴を持つ反切まで取り込んでしまった。しかしその一方で二等重韻の合流といった『切韻』にも『玉篇』にも見られない特徴も見られる。これに關わる反切は當然のことながら、『切韻』、『玉篇』のいずれとも一致しない。これこそが玄應の獨創という見方もあるが、もう一つの可能性として第三の「蔭の辭書」の存在の可能性を指摘しておきたい。それは書名すら分からないが、恐らく秦音系の韻書若しくは字書、音義書であったろう。『慧琳音義』には、このような特徴を持っていたであろう小學書として『韻英』、『考聲切韻』、『韻詮』、『開元文字音義』等が擧がるが、成書年代は何れも『玄應音義』より遅れる。もし『玄應音義』の二等重韻の合流に關わる反切が『慧琳』所收反切と一致しているなら、共通の典據があったということが考えられる。そして秦音の性格を持つ韻書の由來はかなり古く、六朝にまで遡るといえる可能性がある。

注

(一) 四行下の部分でも「長安方言音原文…長安方言」を「讀書音原文…

『玄應音義』反切と『切韻』反切

讀書音」に、「長安音原文…長安音」を「讀書音原文…讀書音」に改めている。その他、周法高一九四八〇を周法高一九六三に収録する際にも同様の修正が行われており、「長安音を代表する原文…代表長安音」(四一頁)という表現を「當時の長安の讀書音を代表する原文…代表當時長安的讀書音」(七頁)と改めている。

(二) 以下の二例に『玉篇』という書名が見える。

溢泥 又作潮。同排咸白監二反。無舟渡河也。說文涉渡水也。『玉篇』

皮氷反。847/1

髓腦 蒲忍反。『說文』膝骨也。『玉篇』云、膝端也。『大戴禮』曰、人

生茸而髓。下又作腦同 202/3

前者の『玉篇』皮氷反』は大治本、天理本に見えない。後者の『玉篇』引用部分(『大戴禮』引用部分を含む)も敦煌本系テキストには見えない。このため、いずれも後人の増補と考えられている。

(三) 以下に擧げる例は首都師範大學(燕京论坛二〇一五・二二・二三)及び北京大學中文系(海外學术名家講座二〇一五・二二・二五)における「关于玄应音义的音系性质和特点(玄应音义音韵体系的性质和特点)」というタイトルの講演で紹介したが、講演内容は論文としては未公表である。

(四) これについては『玄應音義』中に見える顧野王の案語に着目した北山(2017)がある。それによれば『玄應音義』は『玉篇』を直接引用していると考えて良さそうである。

(五) 勿(◇釣)とする餘地もあるか。今、上田一九八六〇の校訂に従う。

(六) 李永富一九七三の原文は「繚…繚繞。力小反。一。」となっているのだが、現存『切韻』系韻書テキストの全てで「燎」が擧がる。作業假説に基づいて推定するならば、かく改めざるを得ない。

(七) 他の韻においては全反切が『玉篇』、『切韻』のいずれかに一致する

というころまでには至らないが、同様の状況を見てとれる。例えば『切韻』豪韻相當の掲出字についても、『玄應音義』反切七五例（被切字、上下字の異なり數。同一反切は一とカウント、延べ數ではない）中、四九例が『玉篇』反切と一致し、一六例が『切韻』反切と一致。このうち兩者に一致するものが八例ある。どちらとも一致しない反切は一四例に留まる（具體例は紙幅の制約により省略）。蕭韻では全三七例中、この一致不一致の組合せが、三二、〇、八、七、篠韻では全一三例中それぞれ、八、一、一、四、笑韻では全二五例中、一三、四、五、八となっている。

(8) 唐蘭はこの『玄應』序文中の「唐代の『韻集』」が如何なるものであったのかについても検討を加えており、呂靜の『韻集』とは別物であるとしている。但し呂靜の『韻集』とどのような關係にあつたのかは不明のままである。本稿では呂靜『韻集』の増補改訂版のようなものとの假定の上で推論を進めている。

(9) 簡啓賢二〇〇三に據れば、『字林』には「汗、一故」、「扶、一穴」、「秩、大一」、「姪、丈一」、「智、一皮」、「突、一巾」など、「一」を使用した反切が數多く見られる。なお最後の例は『文選』卷四五に現われるが、反切だけで釋文は無い。これと一致する『玉篇』反切は4.一致反切の現れる掲出字の釋文の16黠で紹介した。

(10) 或いは穿つた見方だが、13嗽の『唐韻』の條に見られるように、「幼」の異體字の「叫」を「叫」と取り違えることがここでもあつたなら、本來幼韻所屬字であるものを嘯韻所屬字と誤認したとも考え得る。但し「黠」は幽韻上聲影母字で、韻目でもある。『廣韻』には去聲の別音は見えないが、幽一黠一幼韻には義注が一致して聲調のみ異なるといった又音が多く兼收されており、「黠」にも『切韻』系韻書未收の去聲の又音が實在した可能性はある。

テキスト

玄應音義

高麗藏本…『高麗大藏經』第三二、東國大學校、一九七五（略稱 麗）

磧砂藏本…『宋版磧砂大藏經』第三〇册、新文豐出版公司影印（略稱 磧）

大治本…古辭書音義集成七、八、九、汲古書院、一九八〇—一九八一（大治本、天理本を収める）

同治八年仁和曹氏重刊本…新文豐出版公司、一九八〇

玉篇

原本系…『玉篇零卷』、大通書局、一九七二

宋刻本…『大廣益會玉篇』（澤存堂本）、中華書局、一九八七（略稱 宋玉）

元刻本…『大廣益會玉篇』（國學基本叢書 經部）、新興書局、一九六八（略稱 元玉）

篆隸萬象名義（略稱 萬象）

高山寺古辭書資料第一（高山寺資料叢書第六册）、東京大學出版會、一九七七

參考文獻

日本語（著者名の五十音順）

上田正一九八一 玄應音義諸本論考、『東洋學報』六三—一、一一—二八頁

上田正一九八六 『玄應反切總覽』、著者自印、總二八〇頁

上田正一九八六 『玉篇反切總覽』、著者自印、總五六—三頁

太田齋一九九八（資料）玄應音義反切と玉篇反切の一致、『開篇』一七輯、一三四—一四〇頁

太田齋一九九八 玄應音義に見る玉篇の利用、『東洋學報』八〇—三、〇一—〇四頁

神田喜一郎一九三三 經流の二大小學家—智鷲と玄應—、『支那學』七一—一、二五—四八頁

- 北山由紀子一九九七 『原本玉篇』の受容について、『玄應一切經音義』との“案語”の比較を通して、一九九六年度富山大學卒業論文（一九九七・一）及第七六回訓點語學會研究發表會（一九九七・五・二）
- 三）發表レジュメ；共に『開篇』二六輯、二〇〇七、二六七―二九八頁に収録
- 小島憲之一九八六 原本系『玉篇』をめぐる ―空海の表現に及びつ―、『神田喜一郎博士追悼中國學論集』、二玄社、一六―一三六頁
- 馬淵和夫一九五二 玉篇佚文補正、『東京文理科大学國語國文學會紀要』三、總一五二頁
- 中國語（著者名の拼音順）
- 陳寅恪一九四八 從史實論切韻、『嶺南學報』九―二、一―一八頁
- 簡啓賢二〇〇三 『字林』音注研究、巴蜀書社、總三七四頁
- 李永富一九七三 『切韻輯考』、藝文印書館、線裝八冊（略稱 輯考）
- 林平和一九七六 『呂靜韻集研究』、嘉新水泥公司文化基金會研究論文三二四種、總一三〇頁
- 陸志韋一九六三 古反切是怎樣構造的、『中國語文』一九六三―五期、三四九―三八五頁
- 周法高一九四八^㉞ 玄應反切考、『中央研究院歷史語言研究所集刊』二十、三五九―四四四頁；後、周法高一九六八^㉞、一五三―二三八、周法高一九六八^㉞、一九五―二八〇
- 周法高一九四八^㉞ 從玄應音義考察唐初的語音、『學原』二、三、三九―四五頁；後、周法高一九六三、一―二〇頁
- 周法高一九五二 三等韻重紐音反切上字研究、『中央研究院歷史語言研究所集刊』二三、三八五―四〇七頁；後、周法高一九六八^㉞、二三九―二六一頁
- 『玄應音義』反切と『切韻』反切
- 周法高一九六二 『玄應一切經音義』索引、中央研究院歷史語言研究所專刊之四十七玄應一切經音義反切考附冊、總八七頁・
- 周法高一九六三 『中國語文論叢』、正中書局、總四五二頁
- 周法高一九六八^㉞ 『中國語言學論文集』、崇基書店、總二八〇頁
- 周法高一九六八^㉞ 『玄應反切字表（附玄應反切考）』、崇基書店、二八〇頁
- 周法高一九八四 玄應反切再論、『大陸雜誌』六九―五、一―二六頁